

写真は記事の後半部で登場するローゼンクランツの新機軸となる最高峰ハイエンドシリーズのリケーブル。写真左が「HP-K's blood」(Rosen Octagon付き、¥200,000 / 税別)、写真右が「HP-K'Element」(Rosen Rectangle付き、¥250,000 / 税別)



注目連載

# オーディオアスリート

クルマとオーディオによるカイザー・チューニングの世界⑦

## “オーディオとクルマの関係”が解明 イヤフォン&リケーブルの魅力を探る

20世紀の2大工業製品といえるクルマとオーディオはその原理や仕組みの上で、共通する要素は非常に多い。そこで本企画ではカイザーサウンドが手掛けるサウンドクリニックを、同社が「オートローゼン」というブランド名で実践しているクルマのチューニングに例えながら解説している。レポートは鈴木 裕氏が担当。連載タイトルの“オーディオアスリート”も自身が「オーディオ」「音楽」「クルマ」をまさに自らの体で体験してきた人物であることから命名したものである。第7回目は、タイヤの組み方の方向性を実証することにより、オーディオとクルマの関係が証明できたことのレポートとともに、ローゼンクランツの新たな柱であるイヤフォン、リケーブルの世界の魅力を紹介することしよう。

●レポート  
**鈴木 裕**  
Yutaka Suzuki  
Photo by 田代法生

クルマのチューニングと  
目指している音との共通項

ローゼンクランツやオートローゼンの製品作り、あるいはカイザーサウンドとしてのオーディオクリニックや機器のチューニング。貝崎静雄さんはその基本的な考え方や個々の現象に対していろいろな言葉やたとえで説明するが、目指している音はどうなるか？ 基本的にオーディオにかかっているストレスを解放することによって、音楽が自由闊達に鳴るようになる。ぶつかり合っていたり、でんではばらばらな方向に鳴っていた音が本来のまとまりや、本来の拡散する音の方向に、混濁していた響きや、こもったり雑味成分がなくなっていく。いいメカニクスが組んだエンジンのように、スムーズに各部が回転し、エンジン音自体がノイズでなくなり、本来のパワーを力強く出力してくれるような感じと言ったらいいだろうか。オーディオ用語で言えば、SN感が良くなり、低音、中音、高音といった音の出るタイミングが合っていて、音の反応が俊敏に。低域においてはどうよりとした重々たる感じが払拭され、高域では倍音がきれいに伸びていく。音が音楽という生き物になり、演奏の良さが素直に伝わってくる。そういう音の変化に感じている。貝崎さん自身が(失礼ながら)あえて書くとク

セが強いというか、アクの強い人間性なので誤解されがちだが、このメーカーの目指している音は、実はまっとうな、あえて言えばナ

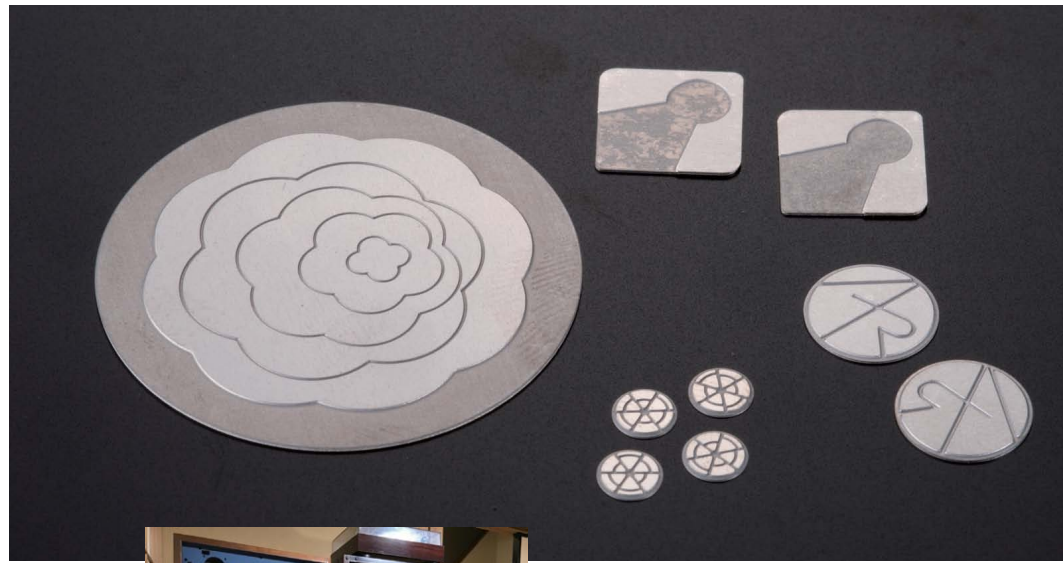
チュラルなものであることを強く証言しておきたい。

①カイザーサウンドのオーディオクリニック

ユニットだけでなく机も！方向性の重要さを再確認

長野県、北志賀の小林正吉さんのスピーカーはJBLの4343だ。パイアンプ駆動で、真空管の

ローゼンクランツが誇る制振の三種の神器。写真左から「Rose Vibration」(¥3,500 / 1枚)、中央上が「Rose Vibration」とセットで使用する「Music Hammer」(¥2,000 / 2枚)。中央下はイヤフォン対策用の「Triple Accel」(¥2,160 / 4枚)と、いちばん左もイヤフォン対策用の「Auto Rosen」(¥2,500 / 2枚) ※すべて税別



小林正吉さんはネットワークプレーヤーのコントロールやBluetooth再生用にiPadを使用しているが、ここに「Rose Vibration」や「Music Hammer」を貼り、悪い共振を対策



北志賀の小林正吉さんの愛用スピーカーであるJBL「4343」。スピーカーユニットの方向性を見直し、ボルトやワッシャー類の位置やトルク管理を最適化。アッテネーターも調節することで、生の音により近づくことができた



パワーアンプを2セット使っている。部屋は和室で左右の条件も違う。小林さん本人の言葉によれば「貝崎さんに見てもらった前も音が出ていたと思っていました」という。しかし、昨年秋にJBL自体のチューニングを行った。やったことは、スピーカーユニットの方向性を見直し、ボルトやワッシャー類の位置やトルク管理を最適化。アッテネーターを調節したのだ。結果としては、音像のまとまりが良くなり、サウンドステージが均一の密度で前後左右にきちんと展開。音が素直にタイミング良く出てくる。

メールでいただいた小林さんの感想を引用させてもらえば「各楽器の位置がハッキリとし、部屋いっぱい音が響き渡るようになりました。それまではスピーカーの辺で音が鳴っていたようです。仕上げるインシユレーターを入れた事で、ハッキリとクリアーになり、音の立ち上がりは速くなりました。自分としては半信半疑ながら目の前でどんどん音が変わっていくのにはびびりしました。その後エージングが進むにつれ、私が求めていた生の音により近づきました」

今回別件で小林邸を訪れ

ただが、来て早々、貝崎さんの「机の向きを逆にしてみて下さい」という言葉によってあらためてモノには方向性があることを体験させられた。スピーカーの前面にある木製のちやぶ台だ。言われた通りに逆になると、低音の重心が下がって、押し出しが増した。中高域のつながりも良くなってしまった。一同驚くが、念のために元に戻すと音も元に戻るの納得するしかない。机の向き、つまりエネルギーの通りやすい方向を持つ大きな物体を適切に置くことによって、スピーカーからの音の引張られ方、カイザーサウンドでは「気流」という言葉を使うが、そういったものが変化するように感じた。クリニックではこうしたことを重ねて、オーディオ機器や部屋を本来の鳴るべき状態にしていくのだが、見事なものだ。

3種類のチップによりiPadの振動を対策

さて、その別件である。ネットワークプレーヤーのコントロール用にiPadを使っているのだが、iPadに入っている音源をBluetoothで飛ばして音楽を聴く時もあるという。つまり、iPadをプレーヤーとして使うやり方だ。

「iPadの薄い形は縦と横と厚み割合が悪く、悪い共振が発生しています。それを3種類のチップ

を貼り付けて対策しますの」と貝崎さん。実際、元の音を聴いてみると、どんよりとした、鼻つまんだような歪みっぽい音で、音像の位置も低い。Bluetoothで試すだけだかどうかがないか、ととりあえずは思う。

最初にローズ・ヴァイブレーション(ローゼンクランツのパラのシンボルマークをモチーフにしたステンレス製の政振グッズ)を2個、その位置や角度などを入念に検討しつつ貼り付ける。この段階で聴くと、たとえて言ううと腰までの下半身(低域)が泥沼に浸かっていた人間がヒザまで引き上げられ、特に上半身(中高域)の解放感のいい、だいぶ身動きの取れる音になってきた。その変化量は大きい。

続いてミュージック・ハンマー(ローズ・ヴァイブレーションによって調和した振動を取り込み、勢いよく放出するターボチャージャーの役割)を4個貼って、ポデイの鳴きをさらにコントロールする。聴くと、音楽(演奏)のニュアンスが良く出てくるし、音像の立体感、各楽器のリアルな表情、全体的なグルーブ感が素晴らしい。振動には「方向性」と「度合い」と「タイミング」の3つの要素があると説明するがそれをローズ・ヴァイブレーションとミュージック・ハンマーによってコントロールして、音楽が鳴る、ということに向きを揃えている。柔道で相手



ランクに応じて音の魅力が向上していく  
イヤフォンもクルマも進歩の勢いがとまらない



### Rosenkranz RK-Silver1

シルバーイヤフォン  
¥180,000(税別)  
※リケーブル、イヤピースの付属は無し  
※オーダーメイド方式(納期1カ月から1カ月半)



### Rosenkranz HP-K's Blood

リケーブル(Rosen Octagon付き)  
¥200,000(税別)  
●プラグ: 2.5mm/3.5mm/4.4mm ●対応: MMCX/IEM/FitEar

### Rosenkranz HP-K's Element

リケーブル(Rosen Rectangle付き)  
¥250,000(税別)  
●プラグ: 2.5mm/3.5mm/4.4mm  
●対応: MMCX/IEM/FitEar



HP-Germay MMCX&IEM  
¥15,000(税別)  
3.5mm single cable / 2.5mm 4pole cable



HP-Grb MMCX&IEM  
¥11,000(税別)  
3.5mm single cable / 2.5mm 4pole cable



HP-Duet/2  
¥100,000(税別)  
●プラグ: 2.5mm/3.5mm/4.4mm  
●対応: MMCX/IEM/FitEar



HP-Trio/2  
¥150,000(税別)  
●プラグ: 2.5mm/3.5mm/4.4mm  
●対応: MMCX/IEM/FitEar



今回も筆者は長野県北志賀のオートローゼンを訪ね、ホイールとタイヤの組み合わせによる走りの違いを体験した

の力を使ってスパーンと投げ技を決めるように、本来は不要な、音楽に悪影響を及ぼす振動エネルギーを、音楽がより良く鳴るように利用してしまっているようだ。

仕上げはトリプルアークセルである。本来はイヤフォン/ヘッドフォン用に開発されたものでドライバーやハウジングに貼っての左右の音を調和し導く役割。今回は、最後の微調整役で、その結果は音の分離や立ち方、位相といったひとつひとつの音のクオリティをさらに上げる方向に効いた。音が「こもる」「ひっこむ」の反対の動きというところからいえるかもしれない。いやそれにしては最初の素のiPadの状態からすると、A/B比較が出来るならば、どんなにオーディオの素人の人にもわかるレベル。

② オートローゼンの現在

さて、クルマ部門。ヒューズボックスの個々のヒューズの向き、ボディアースのケーブルの質自体や長さ、サスペンションを留めているボルトへのオリジナルのワッシャーの導入と、その周方向による乗り味のコントロールなど、今までのクルマの世界の技術とはずいぶん違うものが多いが、今回はホイールとタイヤの組み合わせによる乗り味のグレードアップである。

一般的には、タイヤには軽量な部分に黄色いマーク(軽点)が押し印されており、ホイールのバルブの位置(ここが重いとされている。ホイール単体でバランス調整機にかけてから組むやり方もある)と合わせて周方向の組み合わせをしている。オートローゼンでは両者の「モノの方向性」、つまりエネルギーの流れる向きを勘案する。しかも、当初はそれを合わせていたが、次第にある角度をつけて、ズラして組むということをやってきた。さらに今回は4本それぞれの角度を変えるという。

④ 4本のタイヤそれぞれが音程のように和音を奏でる

どんなに説明しても納得されないだろうから簡単に書くと、「上」に対して「ソ」は5度の音程であり、パワーコードとして成立する和音だ。ローゼンクランツのオーディオアクセサリ類の開発において、ホイールとタイヤの組み合わせに導入。たとえば「ソ」は3分2周ズラすことになる。今回は4本それぞれが音程を持つようにズラして「ド・ミ・ファ・ソ」の和音を鳴らすのだという。シトロエンC5とプジョーの406クーペで基本的に同じことを行った。結果はあまりにも歴然としている。

まず30km/hでまっすぐ走っているだけで、フリクションロスが

低くなり、タイヤを高級にしたもののように、スムーズに転がっていくことに驚かされる。4本の音程が違うのであればギクシャクしそうなものだが、むしろ乗り味は真逆だ。コーナーリングではフットワークが軽くなり、リズミカルに切り返せる感覚がありつつ、フラット感も出てくるのが不思議だ。

最大の疑問点「どうか驚愕は406クーペで感じた。組み合わせをコントロールする前は、右コーナーでは左側のサスのダンパーがへたっているように沈み込みが大きく、左コーナーでは逆に脚が突っ張ってサスが入らず、きれいに旋回していかない症状だった。それがホイールとタイヤの組み合わせをコントロールしたただけでほぼ解消して、どちらも適度にロールして、左右のグリップバランスが良くなっている。クルマ自身が旋回したのかのように曲がっていく。タイヤの空気圧を0.2kPa変えたのがわかる人だったら体感できるはず。

③ イヤフォン、リケーブルの世界

音楽を有機的に表現するリケーブルとの組み合わせ

ローゼンクランツの製品として市場への認知度が高まっているのがリケーブルだ。そしてイヤフォン本体もリリースされている。ユーザーに若い世代の人が多く、いい音に対して素直に反応するということもあるし、プレーヤー(ヘッドフォンアンプ)とイヤフォンの

というシンプルな関係ゆえに結果がダイレクトに出ることもあってローゼンクランツの製品の存在感はどんどん上がっている。

シルバーイヤフォンを使ってリケーブルのほとんどを試聴できたので、その音の世界をまとめておこう。ちなみにシルバーイヤフォンにはケーブルが付属していないのでこの音ということが言いにくいのだが総じて言えば反応のいい、バランスの取れた音だ。演奏のデューナミック(強弱)やタメや前ノリといったビートの表現、ヴォーカルのリアルさやハーモニー感など、音楽を有機的に表現してくれる。

さて、リケーブルだ。最初に最上位の「HP-K's Element」(25万円)を聴いた後に、「一番安い」「HP-Germay」(1万5千円)から順に聴いていったのだが、こういう意地悪しても一番安い製品でがっかりしなかった。音は中域重視のフラットバランスで、見通しのいい素直なもの。たしかに低域の解像度など甘いところもあるが演奏のグルーブ感や有機的な鳴り方がいい。上位モデルと比較すればさっぱりした音楽の聴かせかただ。

ここから「HP-GRD」(11万円)までは、ほぼ順番にオーディオ的情報量や魅力が多くなる。「HP-GRD」で聴いたシルバーイヤフォンの音は、エネルギー強く、コントラストくっきりして、サウンド

ステージの空間が相当に広い。SN感も素晴らしく、エコー成分の消え際がきれいで、帯域バランスのつながりも良く、反応のいいリファレンスの音だ。

これに対して別格の位置付けになるミュージシャンシリーズは総じて味が濃く、「HP-Duet/2」(10万円)からして吟醸の日本酒のようになすっきりしたうまみでありつつ、あたたかみのある音。しかし音の隈取り濃く、密度高く、ビートがくっきりする。

「HP-Trio/2」(15万円)では音像大きめで中域に厚みがありつつ、楷書体のような筆致、瑞々しい音色感。「HP-Quarter/2」(18万円)ではさらに音楽に近い感じがあり、濃密なのに情報量はアップ。

「HP-K's Blood」では全帯域の密度が高く、頭の中だけでなくその外側にまでみっちりサウンドステージが広がっている。骨太なのに細かい情報量も凄まじい。最上位の「HP-K's Element」では暖色系の色彩感で分厚い鳴り方。ステール感や繊細さもあるが、演奏に何かを付け加えるようなことをせず、表現として締まっている。

技術力のあるメーカーは値段に応じて音の魅力が向上していくがまさにそういう序列になっている。クルマ部門といい、イヤフォン関連といい、まだまだ技術が進化している勢いを感じるカイザーサウンドだ。